

国境に飛ぶ鳩—近現代日中関係史の中の詩人・軍人黄瀛

論文要旨

日中双方の先行研究においては、黄瀛の全生涯を貫き、各時期の主な活動を体系的に整理した研究は管見の限り存在しない。黄瀛の各時期における学歴・軍歴、活動の時系列、時代背景と各時期における黄瀛詩作の特徴との関係、日中関係史の進展と黄瀛の人生の転換との繋がりなど様々な問題点が残されている。

本論文は上述した問題点にもとづき、歴史学の方法と比較文学の方法を併用して黄瀛の活動史を実証的に明らかにする。具体的には、日本で掲載された黄瀛の詩作に対するテキスト分析を行うだけでなく、各地の档案馆・公文書館、日中双方の新聞・雑誌・政府公報などの文献資料、図像資料、体験者による口述資料などの史料を活用し、詩と各資料を互に行き来しながら史実を考証、各時期における黄瀛の学歴・軍歴・主たる活動を検討し、日中関係史の中における黄瀛の動きを捉えていく。特に、先行研究で触れられていない黄瀛の家系、国民政府での勤務の詳細について重点的に明らかにする。その上、各時期における黄瀛の活動の年表をあげる。

本論の概要を以下に示す。第一章は、1906年から1925年まで黄瀛の活動を中心に扱う。1906年10月4日、黄瀛は四川省重慶府江北庁における士大夫や教育者を輩出する黄家で生まれた。父親はかつて知県に選抜された清末の拔貢黄沢民であり、母親は千葉県出身で中国に渡り六年あまり、清末四川省女子教育に尽力した教師の太田喜智である。また、黄瀛の叔父、叔母はいずれも学校を経営した重慶の教育家である。黄瀛が父親を早く亡くしたことで幼年期の大家族生活は、人生の原体験として、彼の人格形成、気質と深くつながっていると考えられる。いち早く黄瀛の優れた才能を発見した荻原朔太郎は、かつて『日本詩人』で黄瀛の詩に対し、「黄君の情想は、氣質的に軽快で明るく、それに貴公子風でもある。君は好い意味での氣質的健康性を有してゐる」と高く評価した。荻原朔太郎が論じたとおりに、黄瀛の明るい貴公子風の詩風は、四川の郷土、そして彼の特別な家系によって養われたのである。なお、彼の詩作に一貫して現れている「浮浪児」、「帰郷」の主題とも緊密な関係がある。また、中国近代教育に力を尽くし、後に事業を興し女手一つで黄瀛兄妹を育てた母親太田喜智も黄瀛に重要な影響を与えていた。1914年、8歳の黄瀛は太田に連れられ来日、千葉県福岡尋常高等小学校に入学した。黄瀛は日本語の難関をこえ、小学校1年からずっと第一席で通った。その後、中国人であるという理由で、近くの成東中学校への進学が出来ず、1920年に東京の正則中学校に入学した。黄瀛は正則中学校で勉学しながら、詩の創作に夢中になり、雑誌『詩聖』に作品を発表、同じ号で詩を発表した草野心平と出会った。1923年、関東大震災の発生により正則中学校の校舎は焼失、震災後の不安定な社会情勢があったため、中学校4年生の黄瀛は青島日本中学校に転校した。青島にいた1年間、黄瀛は海港都市青島の風景、中学校生活をテーマとする詩作を作り、『朝日新聞』『日本詩人』で発表した。これらの発表により、少年黄瀛は高村光太郎の注目を引いた。光太郎の彼に対する関心は、彼の創作の動力源になり、ついに黄瀛は『朝の展望』をもって、「大正期の詩壇の公器」である雑誌『日本詩人』（「第二新詩人号」）の詩話会賞・第一席を受賞し、日本詩壇における新進気鋭の詩人となった。1925年3月、黄瀛は青島日本中学校を卒業し、憧れの東京に赴き、東京で新たな人生を始めた。本章は詩人の誕生、来日、青島中学校で詩人をめざすという三つの視点から1906年から1925年まで黄瀛の活動を検討する。

第二章は、黄瀛が1925年3月に東京へ転居してから1930年12月中国への帰国までの

活動を中心に扱う。この時期に、黄瀛は第一高等学校の試験に失敗したが、浪人生活中に高村光太郎、草野心平らと積極的に交流した。1926年4月、黄瀛は光太郎を保証人とし、文化学院へ入学した。当時の文化学院は、与謝野晶子・奥野信太郎らを教員に起用するなど、日本文化界を代表するエリート知識人を集めていた。黄瀛は自由主義的な新しい教育の雰囲気の中で、教師や同級生らとの頻繁な文化交流と文芸実践活動を展開した。また、1927年10月には、陸軍士官学校に入り、軍人の道へ転身、陸士卒業後は陸軍軍用鳩調査委員で特種通信技術を学んだ。士官学校や陸軍軍用鳩調査委員での勉学は、黄瀛の軍人生涯の起点となった。また、中国へ帰国後は15年の長きにわたり、国民政府における特種通信技術の確立に尽力、その技術の権威となる土台を築いた。1925年3月から1930年12月にかけて、黄瀛は日本詩壇と広く交流し、また詩の団体・同人誌を拠点に多くの詩作を発表した。この時期における黄瀛の文芸活動は、大正デモクラシーの自由な風潮の余熱が続く中、アナーキスト詩詩（『銅鑼』、『学校』など）、プロレタリア詩誌（『文芸戦線』など）、またモダニズム詩誌（『詩と詩論』など）が続々と登場する同人雑誌全盛期の流れに乗り、多数の詩作を発表した。これらの詩作には、彼の自由な詩精神が反映されている。黄瀛の「シンボリックな抒情性にリアリズムを交織、またユーモラスな即興詩」という異色の創作手法は、日本の文壇の注目を浴びた。さらにこの時期、黄瀛は中国詩の日本語への翻訳を通じ、中国の新しい詩を日本詩壇に紹介、日中文化交流の懸け橋の役割を果たした。本章では、東京詩壇との出会い、文化学院での生活、陸軍士官学校における軍人への転身、中国新詩の翻訳の四つの視点から黄瀛の日本滞在中の活動を検討する。

第三章は、1931年から1937年の日中戦争が勃発するまでの間の黄瀛の活動を中心に扱う。1930年12月、黄瀛は日本から中国へ帰国し、国民政府軍政部特種通信教導隊隊長（少佐）に任官し、国民政府特種通信技術の軍事教育の創始者として軍務についた。1931年から1937年に日中戦争が勃発するまで、黄瀛の活動は、彼と日本との交流の流れにより、三つの段階に分けることができる。まず一つは、1930年12月から1935年7月までである。この間、黄瀛は特種通信教導隊の軍用鳩・軍用犬班を創設し、中国各地で伝書鳩と軍用犬の通信訓練を行った。また、軍隊生活を題材としておよそ70編の詩作を日本の各雑誌で発表している。二つめは、1935年7月から1936年9月までである。この間、黄瀛は国民政府軍事委員会軍事交通研究所教官を兼任し、軍用鳩・軍用犬を用いた特種通信教育の業務に従事、多忙の中で日本での詩作の発表を取りやめ、軍務に専念していた。三つめは、1936年9月から1937年9月までである。この間、黄瀛は国民政府陸軍通信兵学校（以下、通信兵学校）の創立にともない、通信兵学校特種通信教導隊隊長に任官し、通信兵学校の開校に尽力した。また、1936年9月、彼は特種通信教導隊の将校とともに来日し、日本の軍用犬界と軍用犬養技術について交流した。帰国後、黄瀛は発起人として、中国における初の軍用犬・警察犬改良組織「中華軍警犬促進会」を創立し、特種通信技術の改良を図った。1937年9月には、黄瀛が漢奸として銃殺された噂が日本に広まった。戦争の進展と共に、それからおよそ十年間、日本における彼の消息は途絶え、日本の友人は黄瀛が亡くなったと思うようになった。銃殺による死亡説が取り沙汰されるまでの間、黄瀛は日本で多くの詩作を発表した唯一の中国の軍人として、詩作に軍隊生活や人生の歩みを記している。つまり、この時期における彼の詩作は単に文学作品としてだけでなく、彼の生涯を考証する上で、重要な史料であるとも言えよう。また、黄瀛の活動は日中関係の転換と緊密につながっていたため、彼の詩作及び活動を通じて、この間における日中関係の転換、時代の流れについて捉える。本章は1930年～1937年の間に日本で掲載された黄瀛の詩作、日中双方の新聞・雑誌、国史館の档案資料、および政府公報等を利用して、特種通信技術の権威、

戦前最後の日本への旅、漢奸銃殺の噂の三つの視点から、彼の活動を検討する。

第四章は、1937年7月日中戦争の勃発後から1949年12月までの黄瀛の活動を中心に扱う。1937年11月、日中戦争の進展と共に、通信兵学校の校舎は湖南省臨澧へ移転した。だが、黄瀛は通信兵学校と共に地方へ移動しておらず、12月の南京陥落の5日前まで、南京にいた。それから戦後まで、通信兵学校が相次いで各地に移駐したため、黄瀛は学校と共に、各地を転々とした。その間における黄瀛の活動は三つの段階に分かれている。一つめは、1937年7月、日中戦争の勃発後から1945年8月終戦の時まで、その間に、黄瀛は通信兵学校の軍務のため、湖南、広西、貴州の各地に移駐し、特種通信訓練、軍事教育に従事していた。二つめは、1945年8月終戦後から1949年まで、黄瀛は中国陸軍総司令部少将高級参謀として日本側との交渉工作、戦後の接收工作に参加し、重要な役割を果たしていた。また、その間に、黄瀛は上海・南京に滞在する日本人、例えば草野心平、名取洋之助、山口淑子の引き揚げに尽力した。その後、彼は心平などとの再会を通じて、詩作の発表を再開し、日本詩壇との交流が回復した。三つめは、1949年の一年間、黄瀛は貴州に駐屯する国民革命軍第十九兵团四十九軍二四九師団の少将副師長であり、同年12月に、部隊を率いて決起した。先行研究においては、黄瀛のこの段階の活動に対する研究はまだ十分にされていない。この時期の先行研究が不足する環境的な要因は次のとおりである。まず、日中戦争の起こった後、黄瀛は各地を転々としていたため、彼の活動に関する資料が戦時下の不安定な状態で散佚したことである。また、戦時中、黄瀛の日本の友人たちとの交流が中断されたため、友人との手紙などの資料から彼の活動を検討することが困難なためである。心情的要因は、日中国交正常化以後、日本の各界の人々はそれぞれに黄瀛を訪ねたが、様々な複雑な原因で、黄瀛は自分が経験したことに具体的に言及することを避けていた。上述した原因で、1937年から1949年までの黄瀛の活動に対する日中双方の先行研究は、まだ不足している。特に、戦時中の黄瀛の陸軍通信兵学校の活動、及び1949年中の活動に対する先行研究はきわめて少ない。本章では、陸軍通信兵学校の勤務、戦後の交渉・協力、「竹舎」工作の日本人留用、日本人との交流・詩作の再開、貴州における決起の五つの視点から1937年から1949年まで黄瀛の活動を検討する。

第五章では、1950年から2005年までの間の黄瀛の主な活動を中心に扱う。1966年、文化大革命の発動にともない、黄瀛は日本側との繋がりがあったせいで、投獄されることとなった。その後、十一年の監獄生活を送っていた。黄瀛の消息は再度日本で途絶えることになる。1978年1月、黄瀛は四川外語学院の教壇に立ち、日本文学を教え始めた。宮川寅雄や陳舜臣らの日本各界の人々は重慶に赴いて黄瀛を訪ねた。一方、黄瀛は1984年、1986年、1996年、2000年の4度来日し、日本との文化交流に力を尽くした。日中双方の新聞は、黄瀛の来日、心平らの文化人との再会、黄瀛詩碑の落成について報道している。2005年、98歳の黄瀛はほぼ1世紀の人生の幕を閉じ、重慶で永眠した。第五章では時代の波乱に翻弄された人生、日中交流の架け橋の二つの視点から1950年から2005年までの間の黄瀛の主な活動を検討する。